

中村隆一 編（東北大学医学部附属リハ医学研究施設）

中枢神経疾患の作業療法

長尾竜郎（富山県リハビリテーション専門病院）

編者は先に「中枢神経疾患の理学療法」や運動学関係の書々を世に出され、PT（運動療法）の大家と思われて来たかも知れないが、今回初めて作業療法の本を出版された。

中村は彼の力量にものを言わせて続々と名著を世に送ったが、それらには一貫した傾向がうかがえる。まず感ずるのは厳密な論理の展開である。それが時に難解さやまわりくどさを感じさせるが、なれると逆に痛快にさえ思えてくる。

第1章は、疾病や障害に対する認識論、リハ医療における実践論の概要、第2章一人間活動と発達では、発達の階層性、技能、能力、パフォーマンス、環境圧、ライフ・サイクル、役割といった重要な概念、エリ

クソンの心理社会的発達論などが解説され、第3章では中枢神経系の構造と機能の復習の後、治療の原則が簡潔に述べられる。第4章では、心理的諸問題を簡潔ながら実用的でかつかなりつつこんだ議論を展開している。第5章は、中枢神経疾患概略の復習であり、特別な印象はない。第6章—作業療法の実際では、まず問題解決の方法論の概要、リハ医療の3つの方法論（生体力学的、発達の、リハ的）に触れている。編者は元来発達のアプローチを重視する方である（筆者などは、それが最もむずかしく根拠を要するので、どうも軽視してしまうのだが…）この章の「作業療法への適用原則」の項は少し読みにくいですが、続く「課題（作

業）選択の原則」は大変示唆に富む。評価の項では写真も入り理解しやすい（特に上肢の技能テストが面白い）。次の項の「生活時間調査」は編者らが導入したADL研究の1技法であるが、続く「活動状況（頻度）調査」、「役割行動調査」と共に大変興味深い結果が示される。ついで作業療法の実際が写真と共に述べられるが、各作業の詳細というよりも考え方についてである。

付録として、実際の症例での作業療法の応用でしめくられる。

文献が多数、各章ごとに挙げられている。ただ、出典がわかり易いように本文中にルビをつけてもらいたかった。

本書は作業療法の本とはいえず、人間行動について広範囲な問題にふれられ、医師や理学療法士にも大いに参考になるといえよう。

（B5，頁180，¥4,300，1983，医歯薬出版刊）